縄文ロードに
向けた活動

通信

創刊号

目次 活動紹介…2 学習……2 研修……5 投稿……6 イベント……7

平成10年度 活動紹介

近年縄文ブームが広がる中、「北の縄文ＣＬＵＢ」も発足して一年が過ぎました。全国各地から集った７３名の会員の皆様方の協力で、体験形の学習を中心とする我がクラブの活動も、無事終えることができました。心より感謝申し上げます。ここに、１０年度に行なわれた活動の紹介をいたします。

体験学習　―　原体作り・土器作り・野焼き・発掘体験・骨角器（釣り針）作り
研　　修　―　八雲町・虻田町・伊達市へ遺跡めぐり
　　青森県主催　「縄文フェスタ」へ参加
　　「三内丸山応援隊」ボランティアガイド研修会へ参加
イベント　―　渡島支庁主催　「縄文の道フォーラム」・土器作り大会へ協力

学　習

発掘体験

昨年の夏、大船Ｃ遺跡の発掘を体験する機会に恵まれた。まずは長靴、ゴム手袋の装備に身を固め、遺跡へ向かう。発掘中の遺跡は、土砂運搬用の一輪車などが並び、まるで土木工事の現場のような雰囲気だ。発掘用の移植ごてと土を集める箕をもち、発掘作業員の方の技を見せていただきながら、見よう見まねで自分も掘ってみたのだが、なかなか思うように進まない。

作業員の方は、軽々とさくさくという感じで掘ってゆくのだが、こちらはいつ土器が出てくるかもしれないと恐る恐る掘るものだから移植ごてが空振りしたり、緊張のせいか手首に力が入り勢い余ってしまったりとなかなかスムーズに掘ることができなかった。

しかし、１時間ほどの体験で数個の土器の破片を発掘することができ、自分で発掘した土器のかけらに水をかけ、模様が浮かび上がってくる様子は、忘れられない思い出となっている。

北の縄文ＣＬＵＢ札幌支部　（今野）

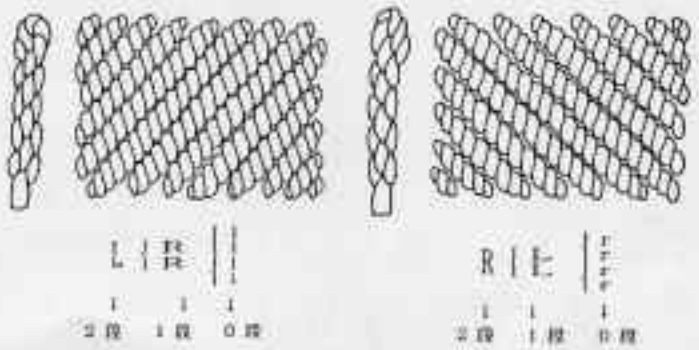
苅谷さんと一緒に発掘

会員の家族も参加して楽しい一時

土　器

クラブが発足して最初の活動は、縄文土器をテーマに、土器に付けられている文様が何なのかを学習しました。縄文土器の名の由来となっている縄目の文様にはたくさんの種類があり、縄の他に貝殻や魚の骨を使ったり、竹や細い棒などの道具を用いて土器に文様が付けられています。この縄目の文様がどのような仕組みになっているのか薄紙を使って、実際に文様の本体となる「原体」作りに挑戦してみました。縄には右撚りと左撚りがあり、これがなかなかうまく撚ることができず、悪戦苦闘しながらもなんとか「Ｍｙ原体」を作りあげることに成功。この日は三内丸山から５名の人たちが参加しており、やはり苦戦の様子でした。帰りの汽車の中で５人とも、駅に着くまで黙々と原体を撚っていたそうです。

次に、この撚った原体を使って土器作りにチャレンジです。今回の土器作りは、青森の三内丸山遺跡と南茅部町の大船Ｃ遺跡は同じ円筒土器文化圏の中で栄えたことから、円筒土器をテーマに作りました。本物の土器は名前のとおり形が筒形をしていて、見た目はすごく簡単そうに見えたのですが、思ったより難しく本物と同じ形になかなかなりません。そうこうしているうちに水分が蒸発してひび割れができたり、表面はデコボコしながらも、なんとか形を整えることができました。ここで「Ｍｙ原体」の出番です。土器の器面に原体を回転して文様を付けていくと、だんだんと縄文土器らしくなって思わずニンマリ。５千年もの昔の縄文の人々に思いを馳せながら、本物の土器と見比べている顔は、皆満足げな顔をしていました。



三内丸山の市川金丸氏も原体作りに挑戦

出来た土器は二週間ほど乾燥させて最後の仕上げとなる野焼きをします。大船Ｃ遺跡に隣接された野焼き用の窯？は、浅く掘り込んだだけのごく簡単な造りのもの。そこにおよそ５０個の土器が勢ぞろい。「どうか割れないで焼き上がりますように」と祈りながら、窯に火入れをします。下焼きから本焼きに入ると火の勢いはどんどん増して、土器が赤く揺らいでくる様はとても神秘的でした。

見事に焼き上がった土器の数々

やがて燃えつきた灰の中から土器が姿を現し、どれ一つ割れることなく焼き上がりました。皆煙と熱さでグシャグシャになった顔で乾杯。ビールが最高に旨かった。大成功！

さっそく焼き上がった土器で実際に煮炊きをしてみました。石を組んでいろりを造り、土器に水を入れてお湯を沸かします。「縄文鍋」と称して小魚や昆布、きのこや山菜などを入れて塩だけの味つけで作ったのですが、なかなかお湯が沸騰せず、しまいにはお湯が土器からしみ出してしまいました。何度か水を足したのですが、やはり沸騰しないので川から拾った小石を焼いて土器の中に数個入れたところ、あっという間に沸騰して材料はみるみる間に煮えてしまいました。気が付くと水もれはなくなっていました。土器の中に材料の成分がしみ込んで目詰まりした状態になるからだそうです。煮えた「縄文鍋」を試食したところ、塩味だけなのにこれがなかなか美味しく、普段私たちは作られた味になれているので、「縄文鍋」の素朴な味になぜか感激してしまいました。

「原体」づくりから始まり、土器づくり、野焼き、土器を使った煮炊きをとおして、私たちのイメージを遥かに超える、豊かで繊細な縄文の人々の暮らしを肌で感じることが出来たような気がします。この次は、もっともっとレベルアップした学習を目標に、縄文の人々の心を学んでいきたいと思っています。

（坪井）

縄文鍋とビール　最高！

骨角器（釣り針）

北の縄文に入り早１年になりました。土器作り、野焼きを体験し、今回『骨角器』である釣り針を作りました。工程は平らにした鹿の角に釣り針の形を描き形にそってヤスリで削っていきます。

その削る作業は想像を絶する厳しい作業でもありました。余白の大きい部分は砥石やヤスリで落とし、ひたすら削る作業、仕上げの形に近づいてきたら、形の違うヤスリで慎重に仕上げていきます。現代のヤスリでも大変な作業なのに縄文の人達は、どんな道具を使い考え出したのか知能の高さには感動するばかりです。

魚の習慣、習性、どんな餌で釣れるのか？又釣れた魚が外れないようにアゲを考えるなど現代におとらぬ観察力、作業に力が入るにつれ縄文人の暮らしが頭によみがえる思いでした。そのうち皆さんと作った釣り針で実際に当時を思い浮べ縄文の世界を再現したいものです。

縄文時代には無闇に魚貝類を採らず自然や、環境破壊などせず、ゴミや壊れた土器は決められた場所に埋めるなど自然を大切にし、争いもない豊かな生活を営む素晴らしい時代を想像します。

それにつれ現代はどうでしょう、魚は根こそぎ取り環境を破壊し、空缶はポイ捨て、人間同士争い、我々はここで初心に返り本当の人間の生き方を考え直す時代ではないだろうか？

未来ある子供達の為にも。僕は縄文の世界に接すれば、接するほど本当の人間の生き方が見えて来るとともに来てほしいと願う一人でもあります。

（大塚）

苦心の作　釣り針

研　修

八雲・虻田

八雲町郷土資料館では、新聞などで注目を集めた「家型石製品」を実際に目にすることができたのが、最も印象的でした。解説して頂いた柴田学芸委員が、「縄文時代の遺跡から、竪穴住居の跡だけでなく、住居の形がわかる資料が発見されるのは珍しい」と言われた通り、見学できた私たち自身にとっても、非常に貴重な経験となったと思います。

また、虻田町の国指定史跡、入江貝塚では、一枚の解説パネルを各々が感慨深げに見つめていました。それは、あるお墓の写真で、埋葬された人は、骨格などから小児マヒだったのではないかと説明されていました。丁寧に埋葬されていることから、体の不自由な人を支え、共に生きようとした縄文の人々の心、そして、仲間の死を悼む心に、改めて感動を覚えました。それぞれの研修先で、新たな発見に出会えた心に残る研修でした。　（小林）

家型石製品を目にして

北黄金貝塚

10月24日、天候にもどうにか恵まれ、21名の参加者と共に伊達市に入りました。昼食をとりながら皆さんとの交流もあり、あっというまの楽しいひとときでした。そこへ伊達市教育委員会文化課長であります大島先生が見えて、私達をカルチャーセンターへと案内してくださいました。そこには重要な出土品が沢山並べてあり、その中でも、鯨の骨で作られた「刀」などの骨角器や、スプーン形骨角製品等素晴らしい物ばかりでした。

まだまだ見ていたかったのですが時間に縛られながらのスケジュールでしたので、次は貝塚へと移動しました。この遺跡は1976年に国指定史跡とされ総面積が約九万平方メートルもの広さなのです。

１つの遺跡で集落全体の様子がうかがえるなんて、それに台地から見下ろせる位置に水場があったり、石皿や擦石、石冠などが盛り上がった状態で発見されたり、そして周辺の住宅の花壇にはあの『石冠』がきれいに並べてあるのです。驚きと物珍しさからか、写真を撮る人もいました。

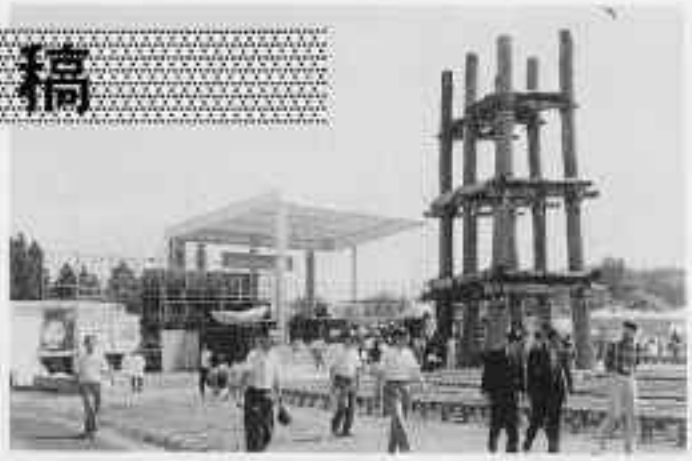
私はほんの数分の間4000年前にタイムスリップしたようなそんな錯覚を覚えずにはいられませんでした。

（嵐田）

入江貝塚の復元住居を背景に記念写真

北黄金貝塚「物送り場」の説明を大島氏から受ける

投　稿


高くそびえる6本柱建造物

「南茅部町のとりこに」

三内丸山遺跡応援隊・ボランティアガイド　若佐谷秋子

私は南茅部町に今まで4回程出かけております。同じところにこれほど足を運ぶとは想像もしておりませんでしたが、すっかり人と、遺跡と、真昆布に魅せられてしまった一人です。一番最初は誘われるままに遺跡のことも、南茅部の事は何一つ知らずに「たまには列車に乗るのもいいなあ」と、しょっぱい川を渡ったのです。南茅部町に向かう途中タクシーの中で、資料を集めてくれた方がおり、コピーしたものをみんなで読み上げ、人口や生活、遺跡のことや昔から真昆布で名の通ったところであり、縄文の自然が今も残っているなどなど……勉強しながらワクワクした気持ちで向かったのです。

案内されて行った所が昔の劇場で、今は倉庫代わりに土器や遺物が所狭しと置かれており、多さとすごさにビックリ。また、建物の屋根に穴が開き、青い空が見えており雨が降ったら大変と、またまた変な所に妙に感動したものです。大船川では鮭の遡上するのを目の当たりにして、生命のたくましさに圧倒されしばらく目を見張ったものです。また、山野草で白花エンレイ草の大きいのには驚きました。

原体作りに参加した時などは思うように（全然）やれなかったので、帰りの列車の中では誰とはなしに口も言わずに黙々とやり出しているのに気が付いて、みんなで爆笑です。骨角器、土器作りと参加して、もてなしてくれた方々の暖かさに触れ、私にとりまして南茅部町は遠い所ではありません。大雨の洪水や地震などのニュースがテレビに「南茅部町」と言う文字がながれますと、兄弟でも住んでいるみたいに妙に気にかかる所です。

これからも、温泉に入ることと役場の金庫の中で休んでいる、本物の中空土偶に会える日を楽しみに、何回でも出かけて行きます。

「感動ミステリーツアー」

三内丸山遺跡応援隊・ボランティアガイド　中村文子

長いトンネルをぬけると、懐かしさと会える楽しみに顔が自然にほころんできます。「縄文人も船にお土産を積んで、きっとこういう気持ちで船をこいだんじゃない。」と仲間の声に一同うなづきます。遺跡見学だけで終わりの予定が、もう2年もこうして交流しているのは、理屈では説明のできない何かがあるのか知れません。南茅部町の遺跡説明をする阿部さんの言葉にも、体験学習に参加しても妙に感動するものがあります。

アイヌ文化に裏打ちされた北海道縄文研究の独自性にふれたのか、町の人の優しさにふれたのかこれも良くわかりません。この感動のルーツは、単に景色が縄文的というだけではなく、もっと深い真相に迫るものなのかなあと思っています。今年もまたこの謎解きをするために、日参しようと思います。

「しょっぱい川」を渡った交流

三内丸山遺跡応援隊・ボランティアガイド　石井ゆり

「通信発刊」おめでとうございます。”しょっぱい川”をさかんに往来しながら築いた円筒土器文化、三内丸山遺跡と北海道側遺跡は切ってもきれないものがあると思います。南茅部町の遺跡と三内丸山遺跡のあまりにもよく似た環境・文化など、特にクリ・土器には驚かされます。

青森県「縄文フェスタ」
ボランティアガイドの方と一緒に火おこし体験

驚かされると言えば大型竪穴住居です。大きい事もですがあの深さ、夢が広がります。早く復元されるといいですね。復元されたらこの中で縄文時代を大いに語り合いたいものです。土器が多いのも驚きです。”圧巻”展示室に整然と並んだ姿、目に浮かびます。展示館は出来るのかしら。

このように北側で栄えた縄文文化を知ることが出来たのも、多くの人と出会う事が出来たのも、三内でボランティア活動をやっていたからです。今後ともしょっぱい川を挟んで過去を知り、未来に向けた情報発信をして行きましょう。

イベント

講師の高橋正勝氏と苅谷俊介氏

大船C遺跡を見学する古代史教室のみなさん

野山の木々が色づきはじめた９月の中頃、渡島支庁や渡島教育局・南茅部町・ＮＨＫ・北海道新聞社が実行委員会を組織し「北の縄文ＣＬＵＢ」などの後援・協力のもと「縄文の道フォーラム」と「土器づくり大会」を実施した。道や町そして民間企業や市民の有志が、縄文文化を普及するという同じ目的のために力を合わせて成功させた画期的な事業であった。

「縄文の道フォラーム」では定員５００名のところ６８０名を超える応募があった。午前１０時から午後４時までという長時間にもかかわらず、縄文時代の交流についてをテーマにした講演や、パネルディスカションに聴き入っていた。「土器づくり大会」では２２０名が参加して縄文土器づくりに取り組んだ。

当初は２００名以上で土器づくりをするのは無理なのではと思っていたが、出来上がった土器は講師の高橋正勝氏も驚くほどの見事な縄文土器であった。それもそのはずで、聞いてみると、参加者の中には長野県や新潟県などで縄文土器づくりをやっている、いわば各地の縄文土器づくり自慢が、口コミでこのイベントの情報を聞いて多数集まってきたのであった。また、２週間後に行なった野焼きでは２００個以上の土器を一度に焼くという無謀な試みを行い、何とか成功することができた。

これらはみな、縄文を愛する一般の人たちの熱意があって初めて成し得たことだと思っている。とくに、土器づくりや野焼きで一生懸命に動き回ってくれた「北の縄文ＣＬＵＢ」の皆さん、そして遠くから参加してくれた「苫小牧縄文同好会」や「三内丸山遺跡応援隊」、また長野の「尖石友の会」や俳優の苅谷俊介さん率いる「古代史教室」の皆さんには、心から感謝している。

町教委　文化財調査室室長　阿部千春

土器作り大会で指導にあたるメンバー

大船C遺跡で200個以上の土器を焼く

会長あいさつ

近年各地のさまざまな発掘調査により、「縄文」のイメージは大きく変わってきました。腰に毛皮を巻き、弓矢を持ち、食料を求めて山野を走り回る原始人の姿から、決してその日暮らしではなく、集落をつくり定住し、それなりの哲学と理念や未来に生きる展望を持った豊かな縄文人像が浮かび上がり、現代人を引き付けているのだと思います。

昨年行なわれた「縄文の道フォーラム」や「土器づくり大会」など各種のイベントには、予想をはるかに超えた参加数に、その関心の高さを実感したものでした。自然と共存した縄文人の精神観に共感が得られているからだと思います。

これからも、一層「縄文」からのメッセージに耳を傾け、学び、語り合いたいと思います。皆さんのご協力ありがとうございました。今年もよろしくお願いいたします。　　（木村）

Books・本の紹介・Books

『北の縄文』

南茅部と道南の遺跡　¥1,400（＋税）

☆　北海道新聞社からグラビア誌が発行されました。大船Ｃ遺跡を中心に、道南の遺跡を紹介しています。

『まほろばの歌がきこえる』

現れた邪馬台国の都　¥2,000（＋税）

☆　俳優で南茅部町にもたいへんゆかりの深い、苅谷俊介氏の古代宮都の全貌を解き明かした著書が、３月16日に発行されましたので紹介いたします。
購読希望の方は、下記へお申し込み下さい。

＊東京都千代田区神田富山町1-2 TKKビル7階
（株）エイチアンドアイTEL.03-3255-5291

一年を振り返って

平成10年度に「北の縄文ＣＬＵＢ」が発足し、一年を迎えようとしています。

昨年はクラブの一員として「縄文の道フォーラム」、土器作り大会、野焼き、その他の行事に参加させていただき、自分なりに勉強になりました事を感謝しています。最後に、クラブ発展のために、会員として一人でも多くの入会を、皆様にお願いして終わりとします。

（濱林）

1999年3月31日　　創刊号発行
発　行　　北の縄文CLUB
連絡先　　北海道南茅部町字川汲1559
埋蔵文化財調査団内
TEL.01372-2-5510
FAX.01372-2-5606